

研究開発学校フォーラム

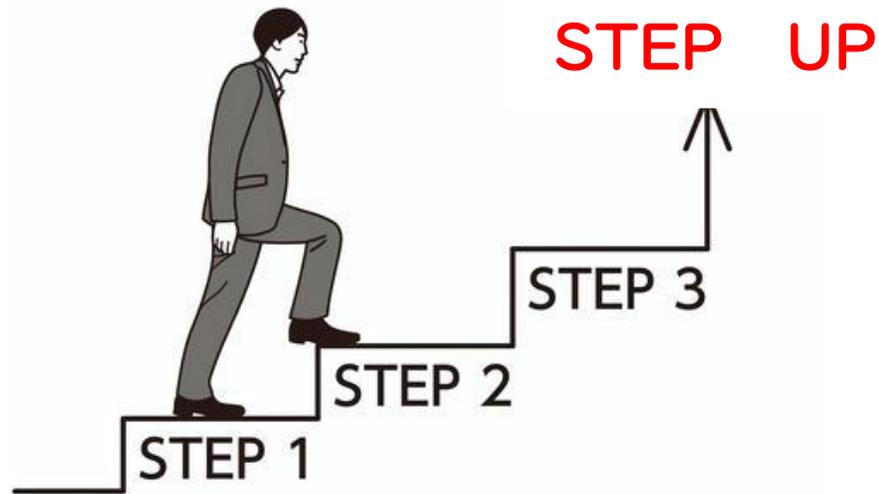
不登校等児童生徒のための
社会的自立に向けた支援の在り方について

福岡市立舞鶴中学校・舞鶴小学校
福岡市立福岡西陵高等学校



1. 研究開発課題

不登校等児童生徒^{*}が主体的に**社会的自立**や**学校復帰**に向かうことができるようにするための**段階的な学校生活への適応の支援**の在り方に関する研究開発



※不登校等児童生徒とは、不登校及び不登校傾向等の児童生徒のこととする。

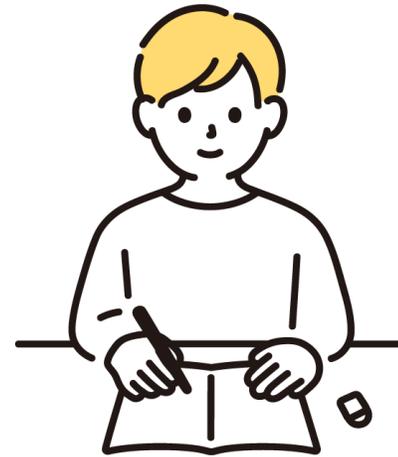
2. 研究の概要

不登校支援の目標

児童生徒の社会的な自立



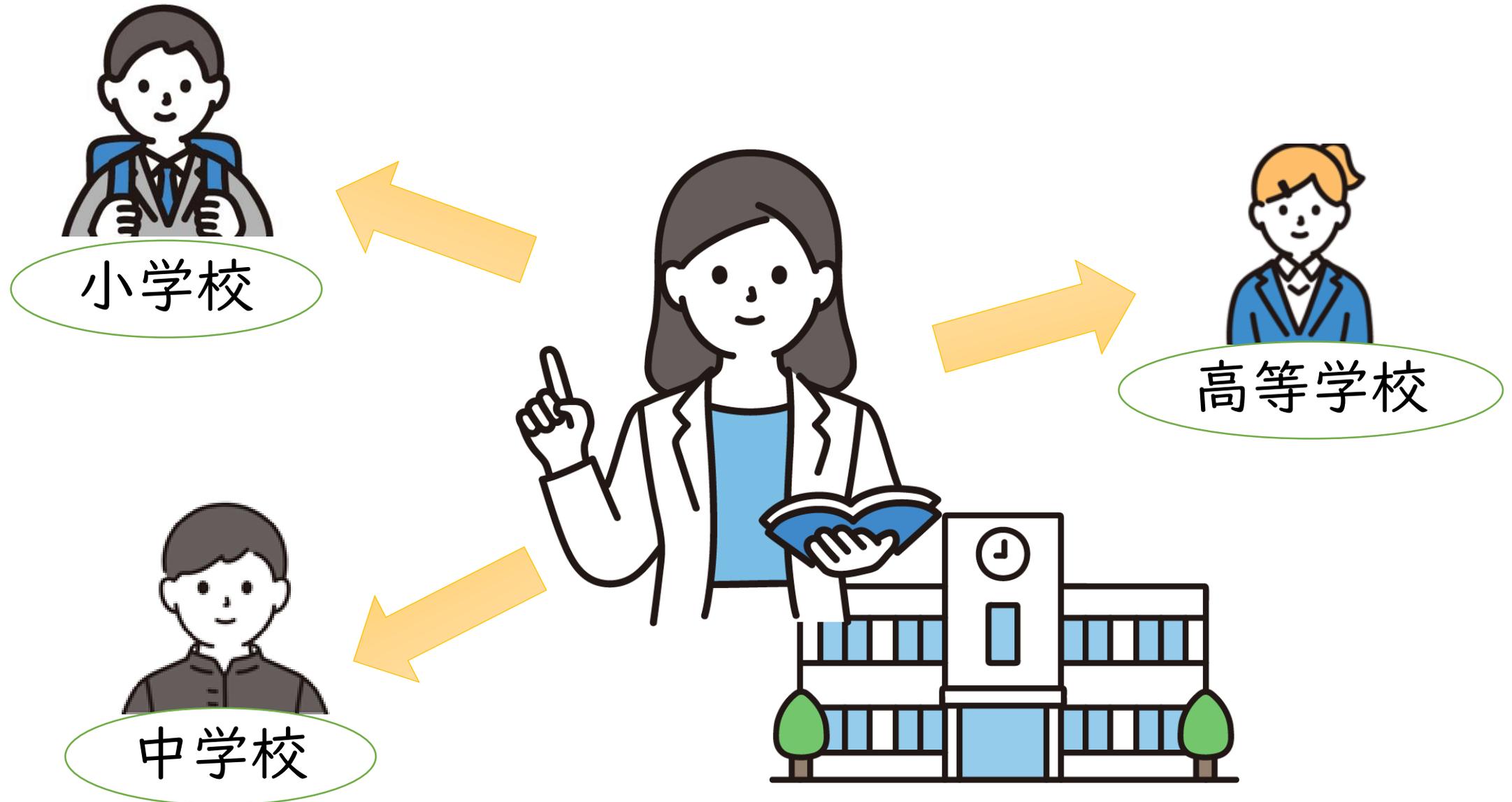
社会性の育成



学力の育成



2. 研究の概要

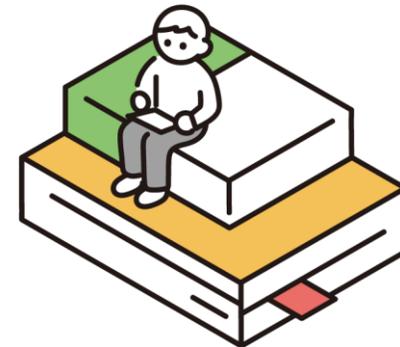


2. 研究の概要

○小・中学校の研究について

「不登校等児童生徒に必要な資質・能力」の明確化を行った上で、教科の新設や統合等を含む特別の教育課程の編成を検討

登校状況や個々の状況、学習の習熟状況等を考慮し、不登校等児童生徒のための特別の教科の創設



2. 研究の概要

○高等学校の研究について

校内に設置する**校内教育支援教室の環境を整備**し、不登校等生徒がICTを活用して授業を受け、**単位認定**につなげる



社会的自立および学校復帰を促す**校内教育支援教室の在り方**の検討



Maizuru ...

福岡市立舞鶴小・中学校

4年間の取組



1. 研究開発内容

教育課程の特例

不登校等児童生徒のための 特別の教育課程

資質・能力



小学校	10教科
中学校	9教科

キャリア
デザイン科

A faded background illustration of a person walking with an arrow pointing up and to the right, symbolizing career development.

①不登校等児童生徒に必要な資質・能力

- (1) 社会的自立や学校復帰に向かうために、個の学習到達状況に応じた各教科の基礎的、基本的な知識及び技能を理解し、適切に使えるようにする。
(知識及び技能)
- (2) 社会生活におけるさまざまな課題に対して、課題を捉え、各教科や実生活で身に付けた知識及び技能を活用して、対処する思考力、判断力を養うとともに、課題解決のため表現力を高める。
(思考力、判断力、表現力等)
- (3) 集団や社会における生活や人間関係をよりよく形成しようとするとともに、自分のめざす姿を見いだし、その姿に近づこうとする態度を養う。
(学びに向かう力、人間性等)



①不登校等児童生徒に必要な資質・能力



主に学習面

知識及び技能

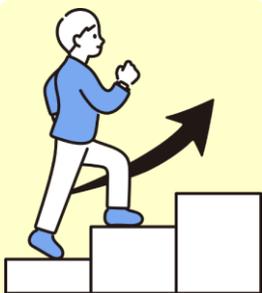
社会生活における課題への対応を考慮し、**ソーシャルスキルトレーニング**を**教育課程に位置づける**。これにより、課題解決のための思考力、判断力、表現力を高める。



主にソーシャルスキル面

思考力、判断力、表現力等

学級への円滑な復帰も考慮し、各教科の基礎的な知識及び技能を身に付ける。



主にキャリア面

学びに向かう力、人間性等

学校復帰、社会的自立を目標に、自己実現や人間関係づくりに向かう態度を育てる。



②個別の教育課程の編成

登校状況による不登校等児童生徒の分類
キャリアプレイス（以下 CP）

情報の整理・
 変化の見取り

週当たりの登校日数によるキャリアプレイス

	CP1	CP2	CP3	CP4	CP5
登校日数	週5日	週3日以上	週1日以上	登校していない	
登校状況	<ul style="list-style-type: none"> ○教師ステーション、ステップルーム等、主に学級の教室ではない別室で過ごす児童生徒 ○オンラインを使用した学習（オンライン授業・学習コンテンツの利用）をしていると認められる児童生徒 			<ul style="list-style-type: none"> ○児童生徒との面談や家庭との連携が可能 	<ul style="list-style-type: none"> ○教員や関係機関職員等による児童生徒との面談が難しい

②個別の教育課程の編成

キャリアプレイスごとの登校目標と社会的自立に向けた目標

	CP1	CP2	CP3	CP4	CP5
登校状況	週5日登校	週3日以上登校	週1日以上登校	登校していないが、児童生徒との面談や家庭との連携が可能	登校せず、教員や関係機関職員等による児童生徒との面談が難しい
登校における目標	教室復帰を含めた、学級との関わりの増加を目指す。	教室復帰を含めた、学級との関わりの増加を目指す。	登校頻度や学校滞在時間数の増加を目指す。	教員や関係機関職員等との、自宅以外の場での面談を目指す。	教員や関係機関職員等との、電話やICTを利用した会話や面談を目指す。
社会的自立に向けた目標	自らの進路を主体的に捉え、他者と適切に関わりながら自己実現を目指す。	自らの進路について考える。また、自らが必要な支援を他者に適切に求めることができるようになることを目指す。	自らの進路について考える。また、他者と対話したり、協働したりすることにより、自らが必要な支援に気付くことを目指す。	他者との対話により、現在の自分を見つめ、理想の自分の姿を思い描くことを目指す。	教員や関係機関職員等、家族以外の他者とのコミュニケーションを図ることを目指す。





主に**学習面**

- 教育計画の**重点化**及び**短縮化**
- 学習到達状況に応じた**5段階の教育課程**
- 教科書の単元配列に準拠した計画

教育課程の重点化及び短縮化

○重点化

各教科で重点単元を設定し、不登校等児童生徒の登校状況によって**優先的に学習**

○短縮化

別室、オンライン、家庭等、学習の場が異なっても**個別に学習に取り組める指導方法の流れ**を設定



②個別の教育課程の編成

学習面における社会的自立の促進

学級復帰

教育課程Ⅰ
教室で行われている授業と同じ内容、進度で学習する

教育課程Ⅱ
基礎的・基本的な知識・技能を使って問題を解く・表現する

教育課程Ⅲ
基礎的・基本的な知識・技能を身につける

教育課程Ⅳ
学年を遡って学習する

教育課程Ⅴ
定着度等、学習面について自己理解する

不登校等児童生徒の教育課程のイメージ



小学校

個別学習（プリント）

個別学習
（動画・AIドリル）



教員による個別授業



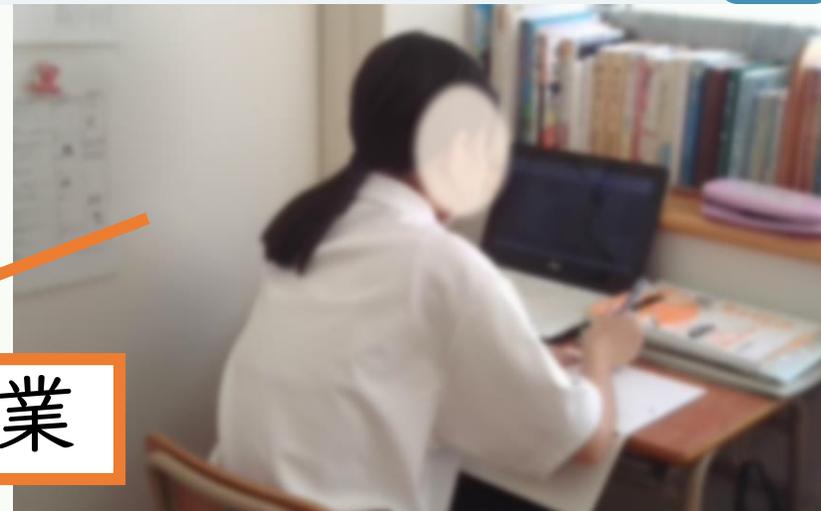
中学校

個別授業

個別学習

教科担任による授業

オンライン授業



動画・ワーク

教科書・ワーク

動画・AIドリル



小学校

<結果>

自分を取り組める教科について、学習する内容や方法を自ら選択し、主体的に学習に取り組んだ。

<考察>

自分の状況に適した教育課程を知り、見通しをもつことができる一方、その日の児童のコンディションや学習内容によって変更する必要がある。

<課題>

小学生という発達段階では、自ら教育課程を決定する力に個人差がある。教育課程の決定や学習を進めるためには、教員によるサポートが必要である。



中学校

<結果>

67%（SR利用生徒12名中8名）の生徒が、自分が取り組める教科について、学習する内容や方法を自ら選択し、主体的に学習に取り組んだ。

<考察>

教科の教育課程は、生徒が自身の習熟状況を客観的に把握し、自分の状況に適した教育課程の段階、学習内容の検討や、見通しをもった学習をするために有効であったと考えられる。

<課題>

生徒が自分で学習状況を教育課程チェック表に記録することができず、教育相談Co.が記録をした。SR利用の人数が多くなると、全員の学習状況を把握する方法に工夫が必要。





不登校等児童生徒のための特別の教科の設置

キャリアデザイン科

将来的になりたい姿を実現するために、ビジョンを明確にしたうえで主体的に行動に移すことを目指す





主にソーシャルスキル面

- ソーシャルスキルトレーニング(以下、SST)を教育課程に位置付け
- 個人的、社会的充足に必要な日常活動の能力を高めるためのワーク



主にキャリア面

- 不登校等児童生徒の学校不適応の要因や諸課題を改善したり、将来への希望をもち、個々の能力を高めたりする





A キャリア形成を目指した側面

職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な「社会人基礎力」(経済産業省, 2011)を育成する

B 社会生活の自立に必要な力の向上を目指した側面

学校で継続的に実習・実践することが可能な「コミュニケーション」「社会性」の領域について社会的自立に必要な力を向上させる

C ソーシャルスキル向上を目指した側面

大人社会への準備段階として人間関係の摩擦やうまくつきあうスキル、集団行動の学習を通し、ソーシャルスキルを向上させる





③特別の教科「キャリアデザイン科」の創設

小・中学校におけるキャリア発達課題

校種	小学校	中学校
時期	社会的・職業的自立にかかると基盤形成の時期	現実的探索と暫定的選択の時期
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・自己及び他者への積極的関心の形成・発展 ・身の回りの仕事や環境への関心・意欲の向上 ・夢や希望憧れる自己イメージの獲得 ・勤労を重んじ目標に向かって努力する態度の形成 	<ul style="list-style-type: none"> ・肯定的自己理解と自己有用感の獲得 ・興味・関心等に基づく勤労観・職業観の形成 ・進路計画の立案と暫定的選択 ・生き方や進路に関する現実的探索



③特別の教科「キャリアデザイン科」の創設

小・中学校におけるキャリア発達課題

校種

小学校

中学校

時期

内容

自分や身の回りの他者、
環境に関心をもち、他者
とかかわり、社会性を育
む内容

自己を理解することや
他者と協働する体験を通
して自分の役割について
考え、自分らしい生き方
を実現するための力を育
む内容





③特別の教科「キャリアデザイン科」の創設

本校キャリアデザイン科における社会的自立のために向上させたい力
(参考：Vineland II 適応行動尺度)

領域	社会的自立のために向上させたい力
コミュニケーション	話や指示を理解する力 話を聴く力・注意を向ける力 聞かれたことに答える力 適切な単語・表現を使う力 複雑な思考の入った会話をする力
社会性	その場に応じた行動をする力 他者と適切な距離を保つ力 他者を気遣う力 同世代の子と関わろうとする力 ルールを守った行動をとる力 マナーを守った行動をとる力 自分の非を認める力 約束を守ろうとする力 いやなこと、危険なことを回避する力 活動の気持ちの切りかえをする力 不快なできごとに振り回されずに気持ちを保つ力





③特別の教科「キャリアデザイン科」の創設

<例：中学校>

キャリアデザイン科教育課程（抜粋）

月	時数	活動名
9	3	○万円でできるかな？ 「はたらく」ということ
		通信制高校体験
10	4	希望の高校生活
		アルバイト探し
		自分に合った職業探し
		私の希望職業レポート①
11	4	みんなの職業レポート②
		○万円の使い方
		クリスマスリース製作
		私の履歴書①

【キャリア発達課題】
 生き方や進路に関する現実的探索

【ソーシャルスキル分類】
 基本的な関わりスキル
 問題解決スキル

【キャリア発達課題】
 肯定的自己理解と自己有用感の獲得

【ソーシャルスキル分類】
 基本的な関わりスキル
 主張行動スキル

※ソーシャルスキル分類
 参考：小林・相川(1999)「ソーシャルスキル教育で子どもが変わる」



③特別の教科「キャリアデザイン科」の創設

調理実習

進路学習

共働・協働



七夕飾り

栽培

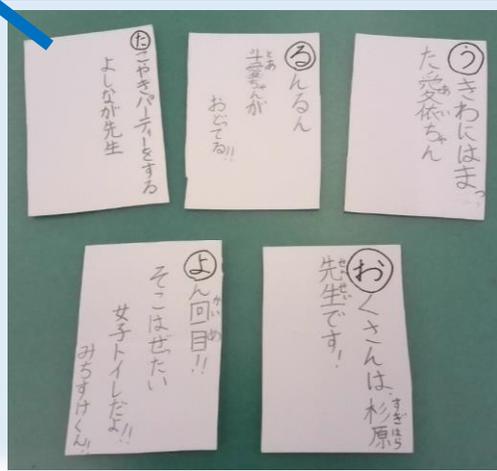
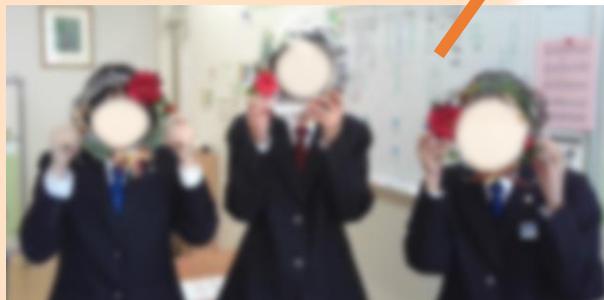
制作

通信制高校見学

SST

クリスマスリース

かるたづくり



工作

消費者教育



<結果>

周りの人のことを考え、ルールを守って活動に参加しようとする態度が見られた。児童の関わり方を観察から、課題を見取り、支援に生かすことができた。

<考察>

普段個別で学習することの多い児童同士が、活動の中で他者と関わることでコミュニケーションを図る楽しさを味わうことができたと考えられる。

<課題>

定期的に同じメンバーで実施することが難しく、継続的に行うことができなかった。参加したくない児童の対応等、支援者のSST実施のスキル向上のための研修が必要である。





<結果>

周りの人との関わりが徐々に増えていく様子が見られた。周りの人との活動や交流を通して、自分の役割について考えたり、中学卒業後の生活について考える姿が見られた。

<考察>

学校生活や活動の中で、周りの人の考えを聞く、自分について考える、意思決定をする、伝えるという場面をつくることにより、自己理解や他者意識が醸成されたと考えられる。

<課題>

キャリアデザイン科の時間を設定することが難しく、参加できる生徒が複数いる時に実施したため、できる活動が限られた。生徒が活動の意義を感じて参加できるための工夫が必要である。



2. 児童生徒支援体制づくり

児童生徒支援の「見える化」

複数の教職員（支援者）が関わり、多面的・多角的に児童生徒の実態を把握し、誰がどのような支援をするかをチームで検討し、実施することにより、一人の児童生徒に対する支援の流れが見える体制



支援体制づくり

「見える化」した支援体制



支援チームを中心に
支援を検討することで、
生徒に対して
誰が
どのように支援しているか
どのような支援をするとよいか
をわかりやすくする

支援チーム

小：児童支援部会 中：生徒支援委員会

学年

管理職



教育相談 Co.

特別支援教育 Co.

養護教諭

SC

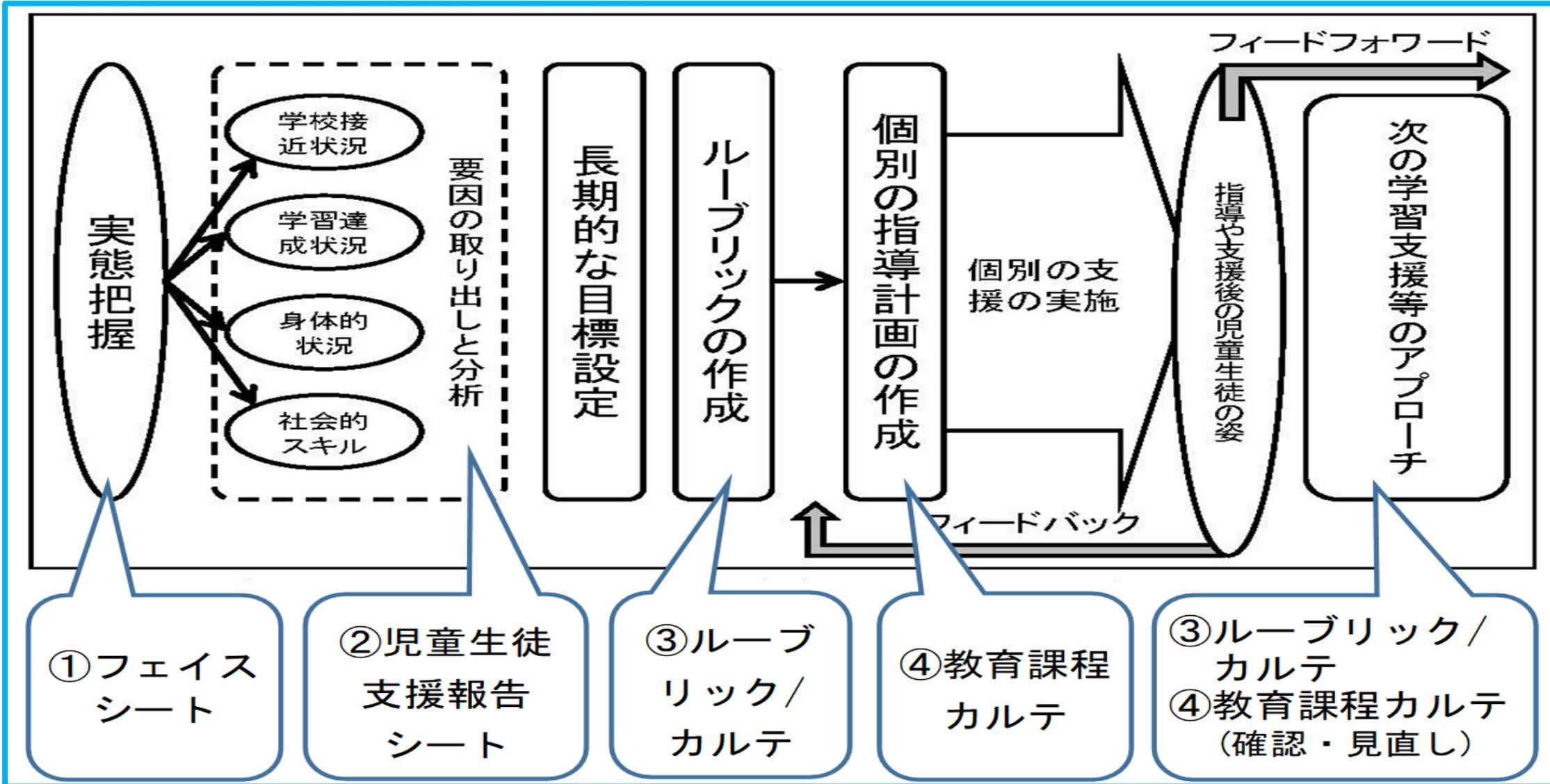
SSW

学年職員

学級担任

※1 SC:スクールカウンセラー ※2 SSW:スクールソーシャルワーカー

支援を見える化するための流れとツール



研究開発における児童生徒支援のフローと各段階で活用するツール

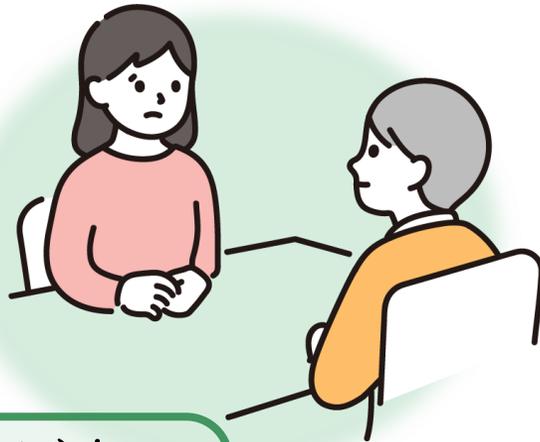


支援体制づくり<結果>

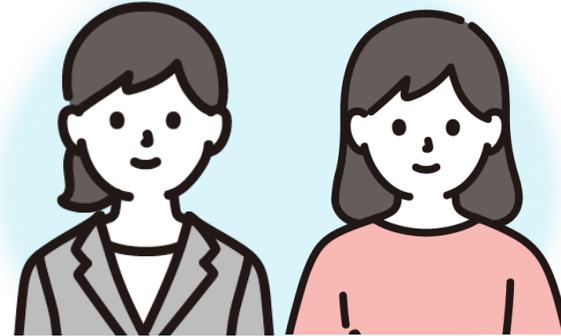
チームで支援の評価や
次の支援の検討をする



学校と家庭が協力して
支援を実施する



支援の様子や、子どもの
設定した目標を保護者に
伝える



キャリアプレイス4・5の例

会えない
連絡が取れない

CP5

会える
連絡が取れる

CP4

<支援の手立て>

家庭訪問・電話連絡
ポスティング

ICT
(メール・Google Classroomでのメッセージ・チャット等)

<実態把握>

現在の状況
興味・関心
思い・願い
困り・苦手

<要因の取り出しと分析>

児童生徒の強みを生かした登校支援や困り・苦手への支援のための手立てを検討

<目標設定・ルーブリック作成>

主な支援者を中心としたワーキンググループによる目標設定、ルーブリックの作成

<使用する様式>

フェイスシート

支援報告シート

ルーブリック・カルテ



児童生徒支援体制づくり<考察>



教職員

特別支援教育
コーディネーター

教育相談
コーディネーター

養護教諭

スクール
カウンセラー

スクール
ソーシャルワーカー



児童生徒支援体制づくり<考察>



関係教職員による
情報共有



支援・指導チームによる
実態把握
支援方針の検討



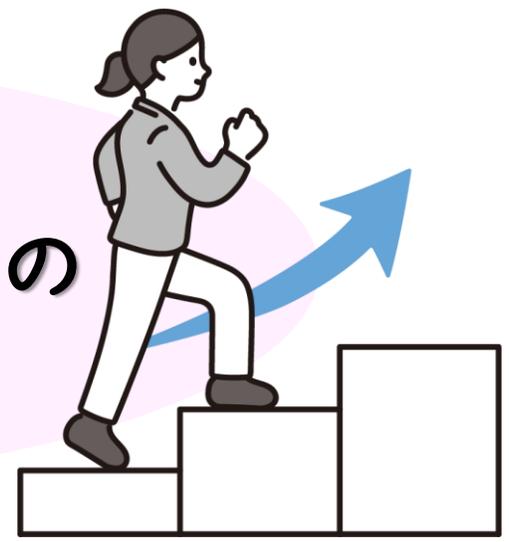
児童生徒の実態
に合った支援や
指導の実施

情報の集約・支援体制の構成・外部資源との連携がスムーズになる
適切な役割分担をすることで、支援の全体像を把握できる

参考：秋光・白木（2010）「チーム援助に関するコーディネーション行動とその基盤となる能力・権限が養護教諭の職務満足感に及ぼす影響」

<総合考察>

児童生徒の
社会的自立に向かう力の
発達を促進



不登校等児童生徒のための 特別の教育課程

小学校 10教科
中学校 9教科

キャリア
デザイン科

組織的な児童生徒支援



<主な引用・参考文献>

- 秋光恵子・白木豊美（2010）「チーム援助に関するコーディネーション行動とその基盤となる能力・権限が養護教諭の職務満足感に及ぼす影響」教育心理学研究,58,34-45.
- 嶋田洋徳・勝倉孝治・板野雄二・杉江征木澤弘・神村栄一・石隈利紀(1996)「不登校やいじめの問題を学校ストレスという観点から考える」日本教育心理学会 第38回総会発表論文集,80-81.
- 経済産業省(2006)「キャリア教育支援ガイドブック 子どもたちの成長をよりよく支援するために」
- 小林正幸・相川充(1999)「ソーシャルスキル教育で子どもが変わる 小学校」図書文化
- 国立教育政策研究所(2001)「キャリア教育を創る 学校の特色を生かして実践するキャリア教育」
- 厚生労働省(2005)「平成17年度における自立支援プログラムの基本方針について」
- 内閣府(2005)「若者の包括的な自立支援方策に関する検討会報告」
- 丹羽洋子・山際勇一郎(1991)「児童・生徒における学校ストレスの査定」筑波大学心理学研究,13, 209-218.

ご清聴ありがとうございました。



福岡市立福岡西陵高等学校

4年間の取組



発表内容

- 1 研究の概要
- 2 成果と課題
- 3 校内教育支援教室を利用した生徒の感想



1 研究の概要



Ⅰ 研究の概要

（1）単位修得をめざす不登校等生徒に対する学習支援

- ① 単位修得につなげる学習支援の基本的フロー
- ② 単位修得を希望する生徒への学習支援の工夫
- ③ 心のサポート（精神面での支援）

（2）校内教育支援教室（ステッブルーム）の環境



(1) 単位修得をめざす不登校等生徒に対する学習支援

○対象生徒

不登校・不登校傾向生徒、病気等で長期欠席する生徒のうち
単位修得を希望する全ての生徒



ICTを活用して単位履修に向けた学習支援



① 単位修得につなげる学習支援の基本的フロー

I

ケース会議



II

オンライン授業の実施
課題提示・提出（評価）
ケース会議



III

成績認定



① 単位修得につなげる学習支援の基本的フロー

I ケース会議

- ・ 生徒の状況共有
- ★ 教室復帰意思の確認
- ・ 出欠方法の確認
- ・ オンライン授業教科等の確認
- ・ 課題提示、提出方法の確認

● ケース会議メンバー
校長、教頭、
教務主任、保健主事、
教育相談担当、
学年主任、学級担任など



① 単位修得につなげる学習支援の基本的フロー

Ⅱ オンライン授業の実施

○場所

- ・校内教育支援教室
- ・病院、自宅等

○課題提示・提出（学習の評価）

- ・Googleクラスルームの活用

○ケース会議（定期的）

- ・生徒の学習状況の共有
- ・学習支援の情報交換 など



① 単位修得につなげる学習支援の基本的フロー

Ⅲ 成績会議

- ・ 教科担当者から学習状況報告
- ・ 成績会議 ⇒ 単位修得認定 ⇒ 進級・卒業



② 単位修得を希望する生徒への学習支援の工夫（1）

○面談・ケース会議

- ・希望教科・科目及び教室復帰目標等を面談により決定
- ・教科担当者は生徒と定期的に面談
- ・授業を担当する全ての教職員が参加するケース会議
→学習状況や学習支援方法を共有



② 単位修得を希望する生徒への学習支援の工夫（2）

○校内教育支援教室（ステッフルーム）

- ・ オンライン授業の授業時間割は教室と同様
- ・ 校内教育支援教室（ステッフルーム）には**学習を支援する教員（学習支援員）**が駐在
- ・ 教室にカメラを設置し、オンライン視聴用にiPadを生徒に1台貸す
- ・ 授業への出席は**学習支援員**が確認をする



③ 心のサポート（精神的支援）

- ・ スクールカウンセラーや教育相談担当などと定期的に面談
- ・ 不登校等生徒の学校内での居場所づくり
⇒ 校内教育支援教室（ステップリーム）

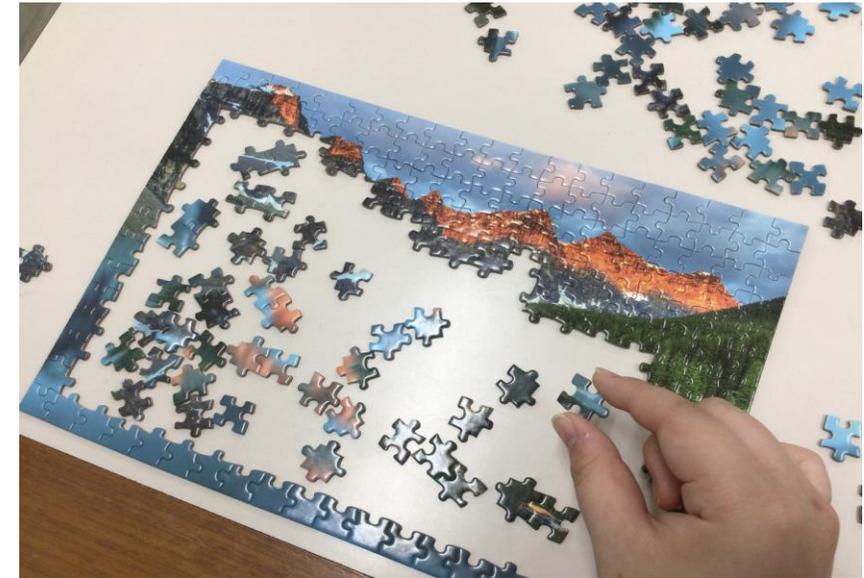
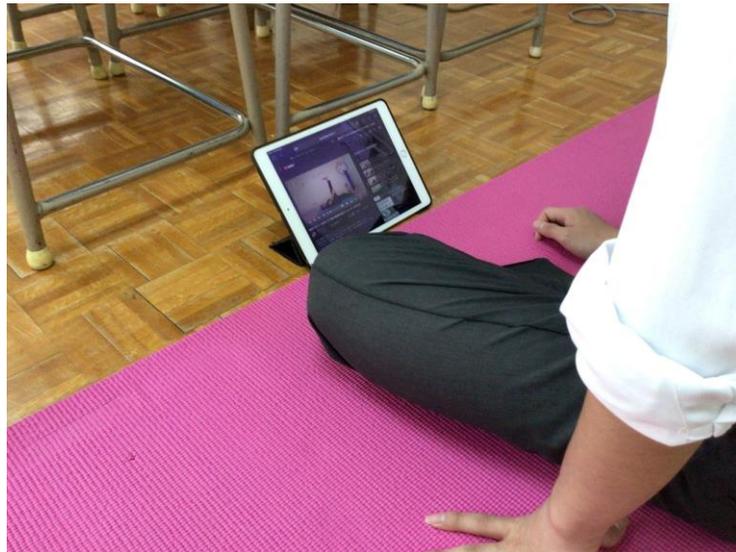


（2） 校内教育支援教室の環境について

全ての教室からオンライン授業を配信できるWi-Fi環境、授業視聴用のiPad、エアコン、連絡用の内線電話、パーテーション、ソファ、テーブル など



（2） 校内教育支援教室の環境について



2 成果と課題



① 生徒への効果

校内教育支援教室を利用した生徒のうち、1名は単位を修得して卒業し、1名が進級時に完全教室復帰を果たしており、一定の効果が確認できている。



② 教師への効果

- ・ 生徒に対する支援が広がってきている。
- ・ 単位修得につながる学習支援方法のブラッシュアップがなされ、学習評価に反映することができた。
- ・ 校内学習支援教室のノウハウを活かし、病気で長期間欠席した生徒にも学習支援を行うことができるようになった。



③ 課題

○校内教育支援教室の運営に関する課題

- ・個々の生徒に応じた柔軟なコーディネート必要性

○柔軟な学びの場の実現

- ・不登校等生徒以外の生徒へのアプローチ



3 生徒の感想



校内教育支援教室を活用して卒業した生徒の感想

- ・自分のために教室を開けてくれたことにとても感謝している。
- ・多くの先生方と話す機会があったことで、前向きな気持ちになることができた。
- ・今は勉強が楽しい。来年度、勉強をして大学受験をしようと思っている。
- ・来年度も校内教育支援教室を必要とする生徒が出てくると思うので大丈夫だよといってあげたい。



ご清聴ありがとうございました

